

在外研修

—中国における高句麗・渤海遺跡の保護—

高句麗遺跡 吉林省集安は高句麗の古都である。特に、万を越す古墳からなる大規模な古墳群は見る者を驚かす。集安古墳の大部分を占める積石塚は、雨風などによる崩壊に加えて、長年期にわたる耕地の拡大や、古墳石材の建築資材への転用などによる人為的な破壊も進行しており、遺跡の保護は急務となっている。近年になされた集安古墳群にたいする大胆な復原、整備には、目をみはるものがあり、増加する観光客への対応策ともなっている。一方では、築造時の墳丘復原などにかんする貴重な資料が失われてはいないだろうかというような危惧も拭いきれない。

渤海遺跡 吉林省延辺地区では、中国語・朝鮮語併記による遺跡の表示、説明が目につく。この地域が朝鮮族自治州に属しているためである。高句麗・渤海とともに中国にとっては少数民族史であり、特に渤海史は、中国では靺鞨族のたてた唐代の一地方政権とし、韓国・北朝鮮での自民族史として扱いとは異なる。多民族国家の遺跡保護のあり方の複雑さをかいま見せている。 (千田剛道)

整備された集安高句麗古墳群
(1994年)

渤海遺跡保護の看板 (吉林省
和龍県龍頭山古墳群 1992年)

—東アジア手工業生産遺跡遺物の研究—

日本の生産工房の理解のため中国の都城遺跡に関する製陶・金属加工遺跡の存在形態と遺物の製作技術観察を主目的として、中華人民共和国の洛陽、西安、南京などにおいて調査を行った。期間は1994年5月26日から7月25日までである。

洛陽では中国社会科学院考古研究所洛陽工作站、西安では同研究所西安研究室保管の新石器時代から隋唐までの標式的発掘資料の観察を行うとともに、工房遺跡についての情報を求めた。漢魏洛陽城内では西北部の区画に集中し、錢貨・陶俑・鉄器・土器など製作物の種類によって独立的に經營され、漢長安城でも主要工房址は「市」の中でそれぞれに単一の製品を生産する体制にある。これが漢代の工房址の特徴と考えられた。しかし、漢長安城ではこうした單一種製作の工房遺跡の他に、宮城街区には陶俑を主体としながらも陶器製作、鉄器加工も行なう工房も存在する事が確認された。

一工房内で銅・鉄・漆・ガラスなど多様な素材を操る日本の古代工房と似た形態の遺跡の存在を確認し得たことは大きな成果であった。しかし、從来の調査と報告が中央政府直轄下の工房に偏っていたにすぎず、こうした経営規模の小さな「私工房」での多種製作も普遍的に存在したのであろう。漢長安城内の陶俑工房出土品の製作は、上半身・下半身それぞれを表裏の範によって製作したのち、上下を接合する方法でなされるが、範は上下ともに複数あり、上下の接合技法は更に多くの種類があり、宮城街区の工房の俑範、技法とも異なっている。俑の製作は唐代においても範による製作であり、俑の製作技法の観察は被葬者の階層性と明器の生産組織の関係に迫りうるであろう。また、唐長安城出土の埴輪観察を希望した。埴輪については調査例が少なく、多くの絢爛たる考古遺物の影に隠れて報告されることの少ない生産関係遺物であるが、日本の埴輪観察の視点と意図を提示して意見交換を行い得た点は大きな成果の一つであった。

南京では、南京大学物質文化研究所故熊海堂教授のもと、南京大学、南京博物院・楊州城などの陶磁器などの調査を行い、南京大学が発掘調査した隋~唐代の洪州窯に楊州城出土の円面硯と同一系譜にある資料を確認し、楊州城の西南部の手工業工房址出土の埴輪には、形態的に大別2種、大きさでは細別5種、技法的には2種あることを確認した。埴輪は基本的には漢代以来変化のない砲弾型であるが多種に分かれたあたりは工房での製作物、ひいては工房の存在基盤とかかわるものと考えられた。また、楊州城の手工業工房では、漆、銅、鉄器、陶器の生産が行われているが、ガラスについては明確な資料が無く、工房で作られた製品が日用的製品で占められていることからすれば、特殊な階層を対象とする生産はまた別の場所で行われたのであろうとの印象をもった。

調査全般を通じて、中国国内の手工業遺跡・遺物の多様性が実感され、日本の手工業技術史研究に際しては、中国起源と目される技術が中国国内において如何なる位置を占めるのかの検討が必要であることを再確認した。古代日本は中国にとっては辺境の一つに過ぎず、形態的模倣は可能であっても技術の点では、直轄工房の第1級の技術との格差は充分考慮しなければなるまい。

期間中、中国の文物管理の厳しい原則の中にあって、任式楠所長をはじめとする中国社会科学院考古研究所の方々からは数多くの配慮を得た。それ無くしては、遺物観察が不可能であっただけに、まさにありがたいことであった。ここに厚く御礼を申し上げたい。また、南京大学教授故熊海堂先生には論文集校正中の公私多忙な中、案内と手工業技術交流史に関する討論の時間を与えて頂いた。この討論は手工業遺跡遺物の比較検討を通じて東アジア古代社会における日本の位置を考えて行く上で貴重であっただけに、帰国後半年足らずで接した突然の訃報は慚愧に耐えないことであった。文末ながら熊先生のご冥福をお祈りするものである。

(西口壽生)